

研究室だより

東京天文台——天文時部・子午線部・天文計算部

報時と編曆とといえば、東京天文台の看板のようなもので、明治政府が天文台を設置したそもその理由は、この二つの仕事をやる役所ということであった。それから時移り人かわって、月や惑星にむかってロケットも飛ぶ現代ともなれば、又新しい趣で天文台の重要な部分を占めている。

まず天文時部から行こう。部長はT教授。天文台の野球部であるトンネルくらぶの試合がある時には、アンパイヤーとして活躍される。若い時からいろいろな観測を経験されただけに、日本ではじめてのPZTを使いこなすまでにした功績は大きい。このT氏の部屋には若い人は少ないが、京都から来られたN助手は左きぎの手でなかなか活躍される。最近では天文台の談話会係など御多忙のようである。

隣室のI講師は原子力潜水艦の如く神出鬼没である。朝は天文台の西の隅の部屋にいるかと思えば、夕方は東の部屋にいるという工合に、宮沢賢治精神を発揮される。なにしろ天文台がリーフラー時計と子午儀で報時をやっていた時代から、今日の如くマイクロ秒が問題になる時代まで、技術・設備の改善は常にこの人がリードして来た。最近では地球自転運動の問題に精力をそそがれている。

この部屋の傑物はM講師。“一つとせ、人のいやがる××に、志願するよな……”という歌にある通り、天文学会庶務理事を進んで引き受けられ、いよいよ煩雑化してくる学会の仕事を見事にこなすかわら、恒星系の研究に打込んでおられる。この部屋は古い時代からずっと天文台に生きて来た名物男が多い。組合大会ごとに名演説で大向うをうならせるK_k技官、可愛い坊やだった頃から、現在の達磨大師になるまで愛きょうをふりまいて来たK_t助手など、天文台の看板ムスコになる人物がこのあたりに多い。

天文時部の中でも、核外電子のようにふるまっているのは名物男S講師の部屋。本命は“恒温観測法”の研究と称して、埼玉県堂平山の上に奇怪な建物をたて、IAUの委員会による天文学分類法では、どこに入るのやらわからぬことをやっている。S講師は最近では“××の励起と減衰の理論”というのにぞっこんほれ込んで、せつせと電子計算機を使っている。堂平極望遠鏡の機械・電子装置のことを一人でこなしたM助手はよゆうしゃくしゃく、子午線部や水沢緯度観測所のための読取り装置まで軽く片付けた腕前で重きをなしている。この部屋の紅一

点のN技官は本務のかたわら月面の根気のいる仕事をこつこつ片付けている。この部屋の三人に共通なことは、それぞれ天文学以外の所で、ボスとして世に知られていること。

子午線部と天文計算部は最近大きな人事交流があった。新しい子午線部長はS教授。目下天文台図書室長としての仕事に御精励である。古くから子午線部に根を下されたY助教授は、南天星の子午環観測に情熱をささげておられる。新しい子午環を日本に建設するのが同氏の夢である。とにかく羊頭をかかえて羊肉を売っている、天文台では珍らしい存在であり、さらに、天文台きってのよきパパとして、その名が天下にとどろいている。この部屋には子午環の改良にこつこつと取組んでいるベテランの多士齊々。この数年間に古参のH助手に天文時からF助手、京都からI助手が加わって陣容がとみに強化した。S教授と共に天文計算部から子午線部に移られたA講師は、目下静かに深く冥想中。天文台の中で自分の机に向っていないときは、必ず基盤の前に坐っているということになっている。

天文計算部の新部長は台長兼任ということになっている。この部で社会的に大きな仕事は、曆象年表や理科年表を編さんすること。数年さきの春分・秋分の日がいつになるかということをかきめる——といつてはやや正確でなくて、教えてあげる——のもこの部の重要な社会的仕事である。昨年まではここにM講師がおられて、古い天文学史料の研究に異色をはなっておられたが、惜しくも他界された。

子午線部から最近天文計算部に移られたのは、有名なK助教授。4年間スミソニアン研究所で、人工衛星理論で名を全世界にとどろかせ、本年の朝日文化賞を、白髪頭のちいさん連中と肩を並べて受賞された。御祖父そっくりの堂々たる風ぼうに加えて、アメリカ帰りのパリッとしたスタイルを見ているものは、これが数年前天文台の中を鼻緒の切れかけたサンダルをつっかけてガラガラ歩いてたとは想像もつかないだろう。最近では御多忙のため、天文台のトンネルくらぶで名内野手としての腕をふるう機会にめぐまれておらぬ様子である。同氏の悩みは助手がないこと。このことは業績に比べてあまりにさびしい。役所としての天文台の矛盾を痛感しておられるようである。編曆関係の仕事の名残りであるいろいろの業務と、新しい人工天体運動の研究の仕事を、どう調和させて行くかが今後も問題になるのではないか。